



うです。夕日がサレーヴの山の数条の白い断層を赤く照らす時、その左肩にモンブランの既に白い山容が赤く青い空に浮かび上がり、その更に左側にモンブラン山系の鋸歯状の山々が連なっているのが遠望されます。スイス客地どこでもそうですが、有名な城や寺院などは一晩中照明が当てられていて、暗黒の中に赤々と浮かび上がる様は、もう絵葉書でご承知でしょう。湖水の畔りに点々と並ぶ灯、そしてまだ空の青さを残している夕暮れ時のモンブランとレマン湖のたたずまいは趣のあるものです。レマンから流れ出すローヌ河の流れはなかなか速く、水量も多く、立派な河なのに、道行く人々はローヌ河などにはおおよそ興味はないらしく、河に背を向けて新聞を展げている人もいます。

## ヌーシャテルの葡萄祭

第二信一九六六年十月

ジュネーヴに来てはじめての日曜日にヌーシャテルの葡萄祭に出かけることになりました。車で二時間程度の所なので簡単に行けてしまいます。ジュネーヴの人々は冬になると、シャモニーなどは日帰りでスキーを楽しみに行きますし、その意味ではここは最適な場所なのです。ジュネーヴ大学にも、「パリへの同乗者求む」という掲示が出ていたりして安く行くことができます。イヴェルドンまではオートルートが快速で、途中の風景もよく、絵葉書にあるような、なだらかな緑の丘の起伏の続く中に、農家や形のったシャレーが車窓を過ぎて行きます。どの家の窓にも赤い花が咲いていて、年中花を絶やさないのであることが分かります。車窓の左側に見える低い山なみは、もうフランス領で、その麓は高い糸杉に囲まれた農家が色とりどりに散らばっています。フランス領に入ると、街お中でも時折馬車が見られるそうですが、木々や家屋の様子が、いかにもフランス南部の柔らかく、暖かい雰囲気を与えていて素朴さを感じさせます。途中、イヴェルドンを超えて、ヌーシャテル湖を望むレストランで中食を済ませ、午後にはヌーシャテル湖に着いた時には、もう湖岸沿の歩道は車が街の中心から続き、白い手袋をつけたお巡りさんが車を待ち構え次々に来た順に道の片側に駐車させていました。遅く来れば、町まで相当歩かなければならないという訳です。町に入ると流石にお祭りらしく、きれいに飾られ、ソーセージ、ポップコーン焼き栗などの屋台が町の中心に向かって軒を並べていて、雑踏を味わい、東京を思い出すこと頻りです。広場には遊園地ができていて、メリーゴーラウンド、射的など大人も若者も子供たちも浮き浮きとし楽しげで、ラウドスピーカーのマーチ唄声が町を包んでいます。祭り自体は町の中心の一部を仕切って入場料を取り、その中でだけいろいろなフロートがって廻るとい趣向です。その中の一番の目抜き通りは指定席になっていて、そのすぐうしろはヌーシャテルの湖水が岸を浸しています。フロートは花で飾られたものがおおく、各カントンから参加し、例えばジュネーヴのフロートは深紅のさまじまの花で飾られ、純白の衣裳を着けた五人の美女がバレエのポーズを取るといった趣向のものでした。その合間に幾つもの素人のブラスバンドがスイスの衣裳を着け賑やかに行進してゆく、お祭り気分は盛り上がります。通りすがりの人に紙片をぶつけ合ううのも無礼講というわけで、早速1フランで紙袋いっぱいのは買って投げつけると、スイスの人はまさか東洋人からぶつけられようとは思いませんから、本当にびっくりした顔をします。しかしわれわれもよくやられました。しかし女性性は髪にくっついて取るのに苦労するせいか、ぶつけられそうな気配だと、われわれの手にじっと目を注いで近付いてきます。中には子供を先に歩かせて用心している婦人までいましたから、余程あと始末に困るのでしょう。したがって葡萄祭とはいいいながら、わずかにあるフロートが大きな葡萄樽をのせて葡萄酒をサービスして廻るぐらいで、あまりそれらしい雰囲気はありません。もっとも葡萄の収穫はこのお祭りのあとということですし、年に一度のお祭りとして近郷のスイスの農家の人々も大勢集まり、大いに騒ぐというのも、いつも秩序正しい生活をしているスイス人にとっては大きな楽しみなのです。しかし全体として町は浮き立っているのですが、個々の人を見ると普段のスイス人と変わらないように見えます。矢張りスイス人の楽しみはこうしてそれぞれ分を守って、いついかなる時でも節度ある態度をくずさずに祭りに参加するということでしょうか。仕切られた街区の外から、たくさんの方が鈴なりになって建物の合間に見えるフロートを静かに眺めているのは印象深いことです。日本のお祭りではまず皆無と思われそうですが、スイスでは例えばジュネーヴでも街区を仕切って入場料を取るそうで、われわれの想像外のことです。祭りは夜も続きますが、時間を考えて五時頃帰途に着きます。ヌーシャテル湖は、今日一日の快晴の名残りに青空の下で、まだ陽に映え、祭りをよそ

に白いヨットのお帆が悠々と風をはらんで湖を進みます。ローザンヌの近くのシオンの城を見る積りで、ローザンヌに出てレマン湖に沿って走るオートルートに入りましたが、時間が遅いのでそのまま帰途につきません。モルジュを過ぎ、古い街並の残るニオンの町に入ると、もう陽は落ちて、曲がりくねった石畳の道を街灯が照らしています。ここでも葡萄祭でフロートの通たあとらしく色とりどりの紙吹雪で埋まっています。祭の後の倦怠が、そここに、壁に凭れて立っている若者達を支配しています。カフェのテラスでは灯の中で祭の後を楽しうように、石畳をじっと見つめ、葡萄酒のグラスを傾ける人の長い影がテラスに落ちていきます。残念なことに立ち寄る時間がありませんでしたから、そのまま通過しましたが、その背後に照明されてくっきりと浮び上がったニオンの城も、祭の終わった静かな街を慈しむように見下ろしています。レマン湖畔を走って、ジュネーヴの対岸の一行の灯の湖水に映るのが見えて来ると、快晴に恵れた一日も終わりです。そして今夜の葡萄酒も格別にうまいことでしょう。

## ジュネーヴの音楽

### —— ジュネーヴ便り（二） ——

#### 第三信一九六七年一月

ジュネーヴばかりでなくスイスの音楽は、ローザンヌに本拠を構えるスイス・ロマンド管弦楽団とエルネスト・アンセルメに代表される感がありますが、特にアンセルメがローザンヌ大学の数学の教授として年を経てからスイスのオーケストラをはじめ組織したという点、まだ歴史的に若いという感じがすることは否めません。しかし、若きモーツァルトをはじめ、数多くの音楽家が訪れたジュネーヴには、スイスの他の都市に比べて、音楽の伝統が、音楽愛好家の心を育てているものがあります。ジュネーヴを訪れる多くの交響楽団、ソリスト、そして有名なピアノコンクール、管弦楽コンクールなど、ジュネーヴの音楽シーズンはどれも聴きたいものばかりですが、ジュネーヴの人々にとって、いながらにして聴けるのですから仕合わせです。むろんこれはヨーロッパの大部分の都市についても言えることとで、また現在の日本もほぼそれと似た状況にあるでしょう。ジュネーヴの音楽愛好家を特色づけることと言えば、これらの古典音楽を愛する人々がかかなり上流の階級に属する人達で、特に若い年代の人々は日本と比べて極めて少ないことが目立ちます。従って、音楽会の学割などというものも、ジャズやモダン音楽のものならば有り得ますが、この種のクラシックでは対象にならないのです。もっとも値段は高くても十五フランぐらいですから、東京の水準からすれば安いと言えます。ジュネーヴのこうした愛好家の中には、やはり自分で楽器をいじり、音楽を体で知っている人も少なくなく、それも若い人々は難しいせいかなさうなようです。その例が、時々当地の新聞などにもその活動が取りあげられるアマチュアのオーケストラ、サン・ジャン・ド・ジュネーヴです。私は幸いに許されて、毎週木曜日の夜八時半からの練習に時々出かけてチェロを弾いてきますが、その練習風景はいつでも同じで、音楽は国際言語であることを、身をもって体験しています。オーケストラ自体は、東京のそこそこにあるアマチュアのオケと変わりなく、モーツァルトを好み、バッハをよく演奏しますが、音は流石にいいものを持っています。チェロを弾く人はもう三十年弾いていると言い、また相当の年配の人がヴァイオリンやヴィオラを弾き、ワグナーを思わせるベレーをかぶった白髪のおじいさんは、かくしゃくとしてホルンを吹いています。オーボエなど実にうまいと思っていると、ジュネーヴのコンセルヴァトワールの学生のエキストラだったりして、その点は日本のアマチュアオーケストラと変わりありません。言葉はみなフランス語で、指示などもフランス語で言われるのもなかなか面白い経験です。このオーケストラは、時々、ジュネーヴ郊外の小さな村に出かけて演奏会を開きますが、バスで出かける演奏旅行は愉快で、週末のたのしみも一層です。英国人の若い友人はヴァイオリンを弾いていますが、彼もジュネーヴの国際機関で働きながら、音楽をするたのしみを棄て切れずに集まる一人です。時々彼のアパートに出かけてはレコードを聴き、いろいろ議論をして夜を過ごすのも、雨の多い暗い日の続くジュネーヴでは、時たま早朝の身を切るような冷気の中に姿を見せるモンブラン山塊のように、心を洗われるような気分にしてくれるものです。この友人のレコードの中に、モーツァルトのオーボエ・カルテットや、ヘンデルのアレクサンダーフェストのような好きなレコードを発見します。

更に、スイスロマンド放送局では付に何回かスイスロマンド管弦楽団の生の演奏を放送しますが、その際は五〇サンチームで手軽にスタジオで演奏が聴けるのですよく出かけます。楽員も平服で、思い思いの格好で気軽です。

木曜日の午後は、私は音楽を聴く機会が多いのです。例のオーケストラの練習もそうですが、私の住むグラン・サコネのシュマン・デ・クレ小路の曲がり角にある簡素な様式で、スイスふうのとんがり屋根の時計台をもつ教会では、通りがかると、よく演奏をしているのが聞こえます。それがあつた時にはバッハのフルートとオルガン通奏低音付のソナタであつたり、ハープのアンサンブルだつたりして、ついつい通りがかりに聴き惚れてしまうのです。スイスの教会には殆んどと言ってよいほど派手なパイプオルガンを備えていて、どんな小さな教会でもその調べが流れます。私がジュネーヴに着いた夜は、スイスロマンドの演奏会が、ヴィクトリアホールであり、チューリヒからの列車の中で新聞を読んで知っていた私は、夜になるのを待ちかねて出かけました。一時間ほど遅れて休憩の時間になっていました。正式には入れませんでしたので、外に出て休んでいた楽員に頼んでバックステージから入れてもらい、ジュネーヴの第一夜は、かくしてチャイコフスキーの第五番シンフォニーで幕を開けたという訳です。ヴィクトリアホールはたいして大きくはなく、古い金色彫刻をほどこした装飾と暗い赤のモールがちょうどわして、落ち着いた雰囲気を感じさせます。四階までぐるっとオーケストラを取り囲み、演奏する楽員の間近で聴くということは、東京でのコンサートに慣れたものにてって、今までの概念を根本から覆えられます。音楽がこれほどまでに聴衆に親しみ深く暖かく迎えられるのを見たのは、私にとっては初めてのことです。聴衆は決して多くはなく、思い思いの席に座ってきいています。女性はイヴニングドレスが普通で着飾っています。

私はその後、東京で縁あって知り合ったロンドン交響楽団のコントラバス奏者ヌートセンと、ジュネーヴに同楽団が演奏旅行にやってきた際に、不意打ちの再会を果たして彼を驚かせましたが、ヨーロッパは彼らにとっては最早外国ではなく、このような演奏旅行もイギリス国内を移動するのとさして変わらず、彼自身は先年の日本演奏旅行ほどの興味は全く感じないと、あまりおもしろくなさそうな顔をしていました。彼らの演奏旅行は、その翌日には別の国の都市へ行って、確かにヨーロッパは最早、国を越えた共同社会であるという印象を強くし、またヨーロッパ合衆国という構想の根強い根拠も、一面では否定できないものがあります。しかもそれが歴史的にも古い構想であることを思う時、いよいよその感を深くします。やがて春の訪れとともに、ジュネーヴの音楽シーズンも終りを告げます。花々に囲まれる家々の窓も朝日の輝かしい祝福を希い、レマン湖の岸のマロニエの枝先から新芽が出はじめ、春先きの、霞に煙る街々のシルエットに一際、聖ピーター寺院の緑青の尖塔が、春の陽光に聳えるのが見られるでしょう。

サティニーの夕焼け

ジュネーヴ便り三

第四信一九六七年春

ジュネーヴの郊外十キロ程のサティニーは、ジュネーヴのコミュニーの中でも最も古い方に属していて、葡萄畑がなだらかに続き、点在する林の間にシャトーが見えかくれる穏やかな丘陵地帯です。北西間近かにジュラの連山を、南東にサレーヴの山、その背後にモン・ブラン山群の一角が望めます。

私はある晴れた午後、若い友人のレイモンの家庭に招かれて、サティニーの彼の家をはじめ訪ねました。コルナヴァン駅から殆ど人の乗っていないCGTE（スイス国鉄）の電車で市街を抜けて、少し荒れた野原を走り、点在する林と家々を見ながら十分ほど載ると、もうサティニーの駅で、ひとところの東小金井の駅を思わせるホームに降りると、そこから彼の家は五分ほどです。踏切りを渡ると、向うからレイモンと弟のローランが走って迎えに来るのが見えました。

レイモンの弟妹は七人で、私はこのゾーレル一家を訪ねるまで信じられなかったのですが、これはスイスの家庭では滅多にない珍しい家族構成で、彼の両親がスイスアルマンのトゥーン地方の出身であることで説明されるのかも知れません。大部分のスイスの家庭は、子供は二、三人が普通で、他のスイス人に聞いても、七人という子供には目を丸くします。レイモンの家は小さいけれども実に能率よく造られた三階の屋根裏のあるシャレー式のとんがり屋根のブロック建築で、まわりは菜園と花壇で囲

まれた傾斜地に建っており、窓からはフットボール競技のグリーンの芝生と、銃の射撃場が見え、その向こうの林の上にサレーヴとモンブランの一角が望めます。

子供はレイモンを頭に、ミシェル、ローラン、ヴェロニク、ガストン、ジューデイト、ナタリイの男四人、女三人で、両親と母方のお祖母さん、それにミノキーという犬と猫、兎など何とも大変な数の家族です。という訳で、お母さんのエレヌもなかなか大変ですから、子供達にはそれぞれ仕事割り当てられていて、十才の四男のガストンは私の傍にいたくて仕様が無いのですが、長女のヴェロニクや次女のジューデイトなどがうるさく呼びに来るので、洪々諦めて立ち上がる様子は可愛らしいものです。ガストンは名前からしていかにも強そうですが、山とスキーが大好きで、近くのジュラ山脈にお父さんと登っては、推奨水晶や太古の貝の化石などを探し歩いて、今は沢山の標本を持っています。早速自慢の水晶の大きな塊まりを持ってきて見せてくれます。お父さんのオットマンも化石など自慢のものがあって、ガラス戸を開けていろいろ見せてくれますが、なかなか見事なものです。今年の夏のヴァカンスや週末には私も連れて行こうということに忽ち相談がまとまってしまいます。

お父さんのオットマンは仏語、スイスアルマン、スペイン語を話しますが、どちらかというと、スイスアルマン語を好むようで、ジュネーヴの化学香料工場の技師です。彼は何万に一人とかいう調香師で大変な鼻利きというわけです。

お祖母さんはスイスアルマンしか話しませんが、お母さんのエレヌが私どもと話をする傍ら、スイスアルマンに素早く通訳してあげます。子供達は、上の四人はスイスアルマンが大体使えるようですが、下の子供達はまだちんぷんかんぷんで、あまりスイスアルマンを喋っているとすねてしまいます。しかし躰けがいいのか、大人の話には加わるものではないというけじめがあるのか、おとなしくしています。

尤もお客の私自身、スイスアルマンは皆目見当がつかいませんし、ドイツ語を知っていても分からないというほど違うそうですから、そんな状態は長く続かず、直ぐにフランス語に戻ります。スイスアルマンは村ごとに違ふといわれ、それを話す人びとの間でも分からない言葉があるそうで、三十幾つかの方言があると聞いたことがあります。文法も一定したものではなく、それを文字に表わすのも不可能で、それをを用いた文学も殆どないというのが実情です。しかしそれでもなお、スイスロマンドの本拠であるジュネーヴで、スイスアルマンを聞く機会が多いのは、一寸不思議な気がします。

友人のレイモンは二十歳の若さですが、現在モンブラン郵便局に勤めています。三ヶ月間の兵役を済ませてからトリビューン・ド・ジュネーヴ紙の記者になるそうで、現在まで幾つかの記事を紙上に書いています。なかなか好感のもてる知的な、元気のいい青年でんで、青年活動に多くの興味と行動を示しています。スイスの兵役は二十歳で約三ヶ月勤めた後、毎年三週間の義務を果たします。レイモンの場合は郵便局に勤めている関係で通信兵人ということですが、一方次男のミッセルは、機械技術の養成研究所へ行っているので航空兵を志願するようです。

このように職種によりその技術に応じた兵種に当てられる訳です。日本には兵役はないと聞くと、みな不思議な気持ちを抱くようですが、しかしここでは兵役も一種のコミュニティの連帯感の基盤としての役割をもっているように思います。

ミッセルの部屋は全て飛行機で充満していて、プラモデル、写真で飾られ、その熱意のほどがうかがわれます。恐らく来年の今頃は小さいパイパーカブで大空を飛び廻っていることでしょう。